

---

《レポート》

『トータルデザイン研究』の記録（１）\*  
—地域連携授業による実践的活動の効果—

---

Record of “Total Design Research” (1)  
— The Effect of the Practical Activity by Regional Alliance Lesson —

---

草 野 圭 一\*\*・加 藤 素 子\*\*  
KUSANO Keiichi・KATO Motoko

---

はじめに

名古屋学芸大学短期大学部・現代総合学科生活デザイン系デザインモデルでは、１年生と２年生合同で履修する科目、「トータルデザイン研究」を2011年度より取り入れて研究活動を進めている。産学または官学連携により総合的視点から物事を捉え、トータルデザインによって社会に貢献する企画提案と実施を行う。外部と連携し、実践的活動を体感することで、企画の発想力やプレゼンテーション力を養い、実社会で活躍できる実践力、そして企画提案したことを実際の商品や作品に具体化できる能力を培い、総合的な“デザイン力”のある人材育成を目指している。

「産・官・学連携」とよく耳にするが、官公庁や企業のほとんどは計画や予算に余裕があるわけではなく、一方、大学も少子化による学校間の競争が激しくなっています。教育の独自性が求められている。連携事業により、お互いに質の高い、より明確な実績や成果を求めているのが現状である。そのような中で、大学はどのように「連携」を行っていくべきか、学生達には何ができるかを考えた。その検証として担当している私達が「トータルデザイン研究」の授業で、デザイン本来の意味を通しながら、地域連携の実践的活動による効果を見いだすことを狙いとしている。

本稿では、デザインの位置づけを明確にし、授業の運営と連携活動の取り組み方法を述べ、具体的にを行った連携による実践活動の報告をしたい。

１．方法

１）デザインの位置づけ

ここでいうデザインとは、将来へ向けてより良い環境を創造するための方向性を見いだす道しるべと考える。過去から現在、そして未来へ、文化や技術を人から人へつなぎ伝えていくことがデザインの役割であり、社会、経済、暮らしを取り巻く生活環境の道しるべとなって創造を促進していくのがデザインの目的であると考え。デザインの方向性とは、ある目標に向かって皆が共通した意識で進んでいくためのもので、そのためには見やすくわかりやすい色や形で表現しなければならない。ある課題を解決するにあたり、役割によって目的を達成するための方向性を見だし、わかりやすく伝える道しるべこそデザインと言える。デザインとは結果ではなく、結果まで辿りつく方法や考え方、そのプロセスである。このようなデザインの位置づけにより、「トータルデザイン研究」授業実施のための運営や体制づくり、取り組み方法、さらに企画提案や作品制作方法等を工夫

---

\* 2011年9月15日受理

\*\* 名古屋学芸大学短期大学部

し、総合的に連携活動を進めていく。

## 2) 授業の取り組み方法

授業科目名「トータルデザイン研究」で、開講期間は2年間通して履修する。そのため授業体制は1年生と2年生合同授業となる。ただし、2011年度は開講初年度となるので、1年生のみ正規科目であり、2年生は自主参加としている。2011年度の履修生は、1年生7名、2年生5名（自主参加）の計12名である。担当は専任教員。

カリキュラムに組み込むことで、外部に対して短期大学部として対応しているという信用と、授業として非常勤講師との協力体制を整えることも可能となる。

〈特徴〉

- ・計画には様々な分野にまたがることが考えられ、専門分野の講師を含めた活動へと幅をもたすことができる。
- ・1年生と2年生合同にすることで、計画が長期に渡る際は2年から1年へ、さらに次年度へと引き継ぐことができる。
- ・学生間のコミュニケーションが生まれ、2年生は1年生の指導を、1年生は2年生から技術を学ぶことができ、お互いに向上し合えることが期待できる。
- ・実践により学外の人々との関わりを持つことで、コミュニケーションの大切さを知り、学生のデザインや地域貢献に対する意識が高まる。
- ・大学生の姿勢や課題制作へのこだわりなど、学生のレベルアップへとつながっていくことが期待できる。

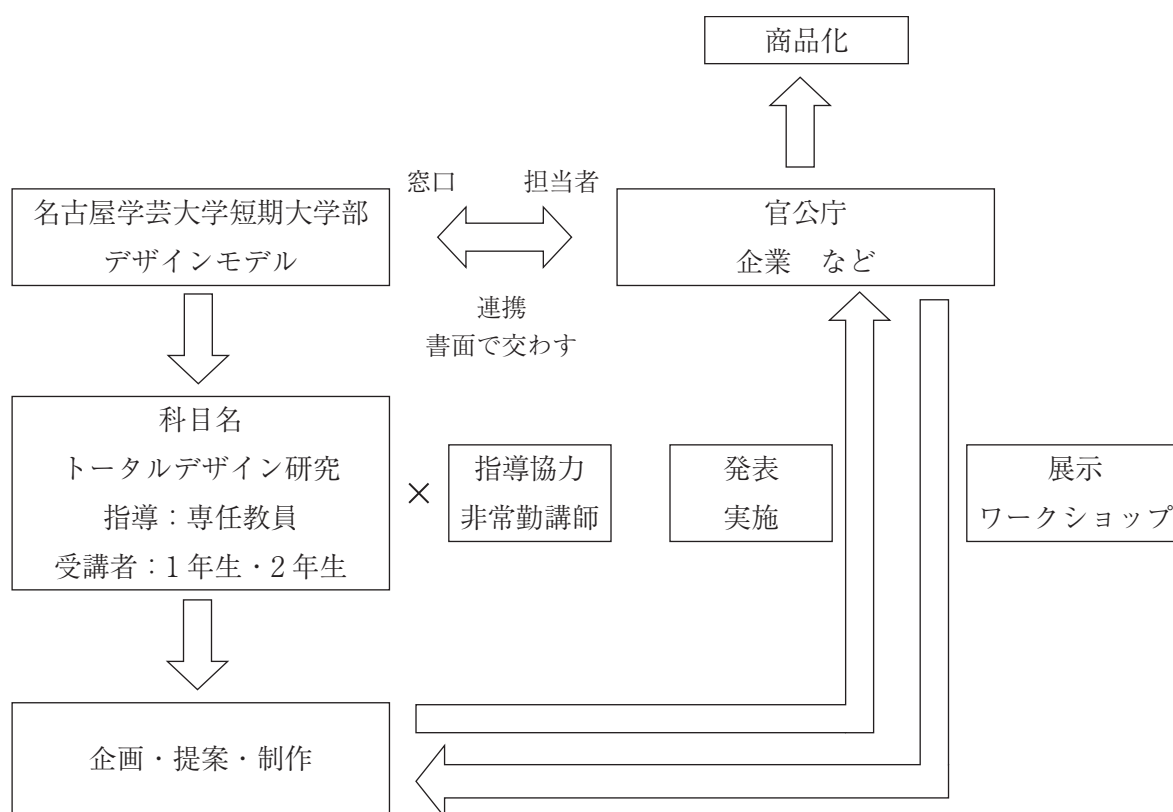


表1 連携事業の活動体制

## 2. 2011年度実践活動

### —事例と試み—

#### (A) 日進市立図書館との連携

##### 〈主旨と目的〉

日進市立図書館において、デザインモデル作品展とワークショップのイベントを企画実施する。授業作品や活動記録などの作品展示により、デザインの面白さをアピールすると同時に、市民へ向けて名古屋学芸大学短期大学部の存在とデザインモデルの認知度を上げる。

ワークショップでは、学生達が中心となり、小学生を対象に親子で参加する「飛び出すプレゼントカード制作」を実施。学生達が手助けすることにより、親子で過ごす充実したひと時を提供し、一つを作り上げる達成感を味わうことが目的の1つである。また、学生は直接参加者と関わり、場を提供する側になることで、参加者の要望を満たす努力をしなければならない。そのためにはコミュニケーションがいかに大切であることを実感する。デザインを生かした地域貢献として、作る楽しさ、伝える喜びを感じ、ものづくりへの関心を高め地域の活性化につなげていくことを目指していく。

##### 〈実践活動〉

作品展にあたっては、展示の搬入、搬出作業を含め、段取りや展示の方法を学び、現場で自分が何をするべきか、学生同士協力し合いどのように完成させていけばよいのか、その場での判断力を身につける。

ワークショップにあたっては、当日制作するプレゼントカードを準備し制作。

1. ありがとうカード
2. 誕生日おめでとうカード
3. クリスマスなどの行事案内カード

と種類を分け、飛び出す仕組みのパターンを数種類準備させる。それぞれのカードは事前に学生自身が制作し、見本を作ると同時に参加者へのアドバイスができるように理解しておく。一度制作することで、どこが難しいか、どうすると上手く作ることができるかなど、学生自身が制作のポイントを見つけることができるようになる。当日は学生が参加者に付き添い、制作の手助けを行う。参加者がどのようなものを作りたいのか、そのためには何をアドバイスすると良いかなど参加者の要望を聞き入れつつ、より良いものへとアドバイスをしていく。実践で来場者との対応は、その場での発想力、行動力、そしてコミュニケーション力が試される。



図書館ロビー展示



子供とのコミュニケーション



出来上がった作品

#### 〈結果報告 A〉(草野圭一)

場所：日進市立図書館

展示：2011年 8 月18日～28日

ワークショップ：2011年8月27日 13:00～15:00

外部との連携による授業「トータルデザイン研究」にて、日進市立図書館との連携によるイベント、授業作品展示と飛び出すプレゼントカード制作のワークショップを行った。ワークショップは対象を小学生親子として、参加7組20名弱の方々が集まった。

参加学生1、2年生全員参加。

展示はデザインモデルの授業作品として、1年生のデッサンなどの基礎デザインや2年生のグラフィックデザイン、ビジュアルコミュニケーションデザインなど専門分野の作品を並べた。図書館への来客は多数で、通りすがりとは言え、多くの方々に見てもらうことができた。

ワークショップは、小学生の2～4年生がほとんどであった。姉妹での参加もあり、積極的に制作に励んでいた。手伝いの学生も小学生にマンツーマンでつき、熱心に行っていた。

図書館の方から、とても楽しく行うことができ好評だったので、イベント時期にはまたお願いをしたいと依頼を受けた。これかも地域連携として地元で貢献できる場をお互いに進めていこうと今後を期した。

## (B) 障害者支援多機能型事業所あゆみ館との連携

### 〈主旨と目的〉

岐阜県御嵩町にある障害者施設あゆみ館で栽培、販売している、しいたけの販売促進のためのキャラクターを制作する。御嵩町とは昨年度、役場のまちづくり課とイベント参加などを行った経緯があり、役場よりあゆみ館を紹介いただき今回の連携に至った。

クライアントである館長の要望、商品であるしいたけの特徴、あゆみ館の特色を踏まえターゲットとなる消費者への商品イメージをどう与えるかなどを調査し、キャラクター制作へと展開していく。実践さながらの作業を通し、学生にデザイン業務の一連の流れを体験させることができる。販売促進ツールとして、しいたけが売れることは勿論、それに加えこのキャラクターが地元の料理を紹介したりイベントでマスコットとして活躍したりと、あゆみ館のしいたけが地元ブランドとして御嵩町をアピールし、まちづくりの活性化に役立つことを目指している。

### 〈実践活動〉

まず、あゆみ館の現地調査から始まる。館長との打ち合わせにより諸条件や要望を聞き、学生があゆみ館で感じたものを大切に、デザインに生かしていく。現地調査をまとめ、全体でどのようなイメージにするのか方向性を話し合い決定する。あゆみ館の名前の由来でもある、“一つひとつを丁寧に、一人ひとりがコツコツと着実に、みんなで力を合わせて前へ歩いていく”をコンセプトに、学生を2グループに分け2案を提案する。この連携事業は次年度へ引き継ぐためにメインを1年生とし、2年生はサポートに回る体制とする。作業の中心は2年生となるが、1年生はその作業を見て、今後自分たちが中心となる自覚と理解をしながら自信を養っていく。アイデア、提案は学生からの発想を重視し導きだす。方向性となるコンセプトから逸れないように、担当教員はアドバイザーとなって学生を指導していく。制作物は企画書としてまとめ、館長へプレゼンテーションを行うためのパワーポイント等のデータ作成も行う。各チームのリーダー、イラスト制作、資料制作など役割を決め、グループワークで制作を進める。社会における仕事のほとんどはグループワークである。チームメンバーが役割と目的を持って、共通の意識で同じ方向に向かって制作を進めていくことの重要性を実感させる。企画書が完成したら授業内でプレゼンテーションを行い、お互いのチームを確認し合い完成させる。デザインは決して独りよがりではいけない。広い視野を持って主観的な強さと客観的な判断で捉えることが求められる。

あゆみ館へのプレゼンテーションは、1年生が発表する。いくら良いものを作っても、相手へ伝



わなければならない。見やすくわかりやすい表現と、言葉による丁寧な解説をし、プレゼンテーション能力を高める。



発表の様子



発表の様子



しいたけ栽培の案内

### 〈結果報告 B〉(草野圭一)

場所：岐阜県御嵩町 障害者支援多機能型事業所あゆみ館

日時：2011年8月31日 13:00～15:30

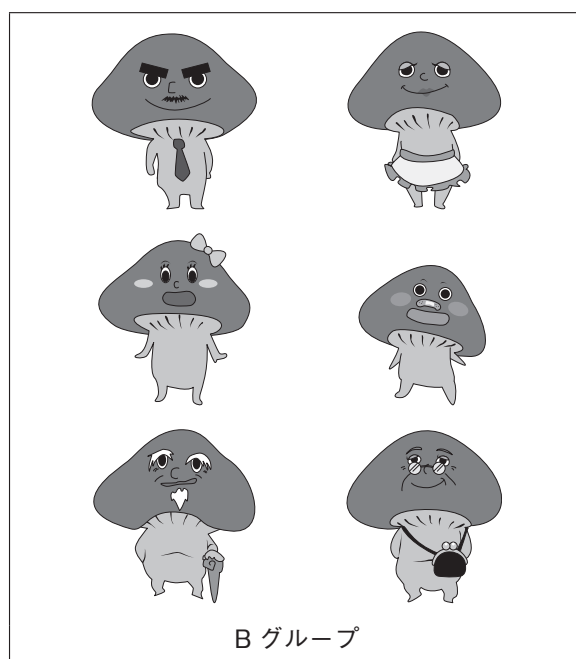
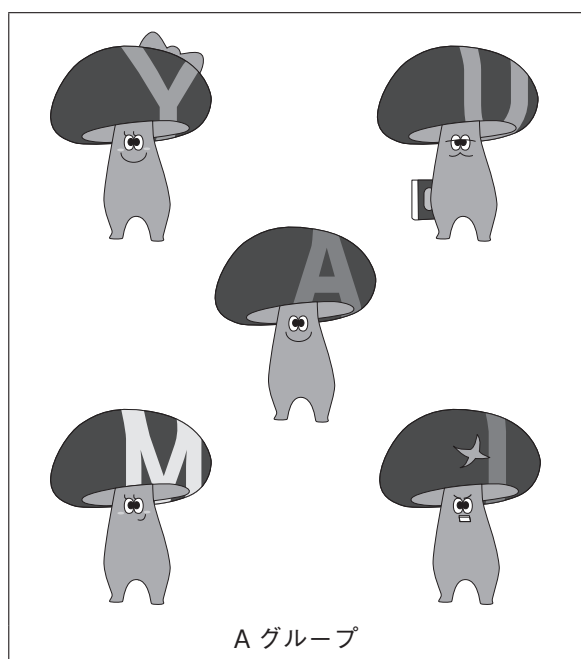
岐阜県御嵩町の障害者支援多機能型事業所あゆみ館で栽培、販売をしているしいたけキャラクターデザインの制作をした。その発表を現地にて館長、担当者にプレゼンテーションした。

参加学生1、2年生全員参加。

キャラクターは2案制作し、それぞれ担当した学生が発表を行った。両案とも先方の要望に応えたものができ、とても気に入っていただけた。そこでどちらか一つを選ぶのは難しいとなり、両案とも採用が決まった。

10月の販売に向けて、一部デザイン修正としいたけの商品名である「あゆみっこ」のロゴを制作する。そして商品を入れる袋に貼るシールも制作し、実際に商品のキャラクターとして使用していただけることになった。

今後は新パッケージの要望もあり、そのデザイン制作、あゆみ館のしいたけをもっと知ってもらうためのリーフレットの制作の話が出た。これらは今シーズンの販売を調査しながら、次年度へと続く連携事業として予定している。



制作したしいたけキャラクター（学生作品）

### 3. 連携授業の利点と問題

#### A) 日進市立図書館との連携

日進市立図書館との連携は、2010年度デザインモデルの卒業作品展を展示したことに始まった。地元での展示会をするためまだ開館して数年と新しく人気が高い図書館へお願いをした。図書館の担当者には、市と大学との連携協力の協定を結んでいることもあり、快く受け入れてもらえた。実際に開催して、来場者からの評判が良かった。図書館ロビーでの展示なので、人通りが多いたくさんの方々に見てもらうことができた。「学生の作品は華やかで元気があっていいですね。」「こんなことを勉強しているんですね。」などと意見をもらい、図書館の担当者と「次年度は展示に加えてワークショップもできるといいですね。」と感想を交わした。そして今年度の連携事業に至った。

名古屋学芸大学短期大学部は、地元貢献することを一つの役割と考える。大学の施設や設備などの開放も貢献の一つであるが、何より大学の強さは研究活動と学生の力である。若い学生のパワーは何物にも代えがたい。

利点として、大学と地域との双方のメリットが考えられる。大学としては学生に実践的体験をさせることができる。机上でいくら論じても、実務で対応できなければ社会へ出て通用するものではない。しかし、通常の授業課題では簡単に実践的な課題を取り入れることは難しい。地域貢献は学生のレベルアップにつながると同時に、学生指導の良い教材である。地元を活性させるために地元根付いた活動が必要とされる。市側にとっても若い学生のパワーを持つ地元の大学との連携は、最善と考えられる。

注意すべき問題点としては、近隣である以上、良くも悪くも情報が流れるのは早い。連携事業を行う際は双方が十分な話し合いをし、焦らず着実に事を進めることが必要である。そして互いに心を悩ます問題は予算である。如何に費用を費やすことなく連携授業、連携事業ができるか知恵を出す必要がある。また、継続することで信頼が生まれるので、長い視点で計画を練っていくべきであろう。

デザインモデルが持つものづくりへの発想や技術と学生のパワー、図書館が持つ集客と地域密着の信用とが、双方のメリットとして一致していることに、連携事業が成り立っていくことができると考える。

#### B) 障害者支援多機能型事業所あゆみ館との連携

障害者施設のあゆみ館との連携は、〈実践活動〉でも述べたように、昨年度の御嵩町役場での活動を通して、役場より紹介を受けたことに始まる。このあゆみ館とは、役場の指定で社会福祉法人慈恵会が運営を行っている施設である。障害者を受け入れ仕事をし、収益から賃金を支払う。パンや菓子の製造や喫茶の営業、ゴミの分別作業などを運営している。その一つとして菌床しいたけの栽培と販売がある。すでに地元ではしいたけの評判は良く、売れば完売するほどである。しかし、館長はただ売れば良いという考え方ではなく、御嵩町のオリジナルブランドとして広く発信したい。そして施設利用者が日々の生活を充実させたいとの要望がある。そのためにはしいたけキャラクターを作り発信できれば、という考えである。役場のまちづくり課と連絡を取り合っていた我々に、デザインを学ぶ大学があるということで声がかかった。今までの役場との関係で、連携事業が成り立ったと言える。このように展開していくことも外部との連携による効果の一つである。

利点としては、グループワークが行えたことである。通常授業では個人制作が主となるので、学生にとっては良い経験になった。キャラクター制作では方向性をしっかりと確認させた上で、話し合いを学生に任せた。そうすることで、自然にチームで役割が決まってきた。

・話を進める進行役

- ・積極的に意見を述べるタイプ
- ・聞く側になってメモを取るタイプ
- ・じっくりと考えて冷静に判断するタイプ
- ・絵に描いて形にしていくタイプ

その学生の特色が役割となって現れてくる。自分が何をしなくてはいけないのか、どうすると作業が進むのか、を学生間で認識するようになり、一人ひとりの責任感が出てきた。この効果は良い方向に向いた。チームが一丸となってキャラクターの制作へと運んだ。ここまで来るのにある程度の時間を要したが、グループワークを何度も経験することで、学生自身自分の役割に気づき、グループでの作業に慣れていくと感じた。

学生が社会に出てまずつまづく点では、

- ・自分が何のために仕事をしているのか？
- ・自分のポジションがわからない。
- ・言われたことだけをする仕事に生きがいを失ってしまう。(離職につながる)

これらは仕事の全体像が見えず、その一部を無責任にこなしている状況に他ならない。グループワークの経験をすることで総合的な視野を持ち、自分自身の特色を明確にすることができるようになる。その上でチームの中で自分の役割を理解し受け入れる。やるべきことがわかればそこには責任が生まれる。そして自信をつけて意見を述べるようになり、コミュニケーションが取れるようになってくる。

グループワークの効果は、自分の存在に気づくことにあり、そうすることで学生の意識を高めていく。これも連携の大きな効果であると推察する。

問題点としては、御嵩の場合場所が遠いことにより調査など現地へ簡単には行けないことである。事前調査では、計画的に効率良く現地調査を進めなければならない。あゆみ館が参加するイベントやしいたけ栽培の様子などは今回調査しきれなかった。また、御嵩町役場との関係で、紹介は受けたが日進市のように大学と連携協力の協定までは行っていない。今後、御嵩町と一層連携を深めていくのであれば必要となってくるであろう。そして予算面の問題は大きい。役場、大学両者共に経費を如何に削減して知恵を振り絞ってアイデアを出していくのか、連携による活動を行う際の課題の重要な部分である。

#### 4. まとめ

外部との連携による効果としてまず挙げたいのは、実践を通して実社会を体感することで、現実社会の仕事の流れなどを垣間見ることができ、社会人として成長できる良い効果が生まれることである。「トータルデザイン研究」で行った、日進市立図書館との連携「作品展示&ワークショップ」と障害者支援多機能型事業所あゆみ館との連携「しいたけキャラクター制作」の2点を事例に挙げて述べたが、両者とも現場へ行き、現地の人と会い、その場を体感したことに連携の意義がある。

図書館の展示では、置いてあった大学のパンフレットや昨年度卒業作品で制作した雑誌が数回に渡って追加した。また、見学者から雑誌について感動をしたとの意見の手紙ももらった。ワークショップでは参加者が楽しく真剣に制作に取り組むことができ、図書館の担当者からは早速次回クリスマスシーズンにぜひお願いをしたいと依頼があった。

あゆみ館のしいたけキャラクターは、2案提案したが両案とも捨てがたく、両方使用することで採用が決定した。さらにキャラクターを生かした販売促進のツールとしてパッケージやリーフレットなどの制作も次の連携として話に出ている。

現在は良い結果が出ているが、これは、授業内容が、総合的にデザインを捉えるという授業内容

で活動を進めている結果である。専門科目に特化すると難しい問題が出てくると考える。まだまだ規模として小さいことではあるが、次へつながる効果も出ている。今後は、この効果を維持するとともに、制作物のレベルアップ、商品化などを目指し、連携先とのコミュニケーションを引き続き十分に取っていきたい。今後他業種の連携先も見いだしたい。

学生は経験不足が当たり前で、多くの経験をして気づいていくものである。大学としても行動を始めない限りは何も見えて来ず、連携先とも信頼関係を築いていくべきである。そのためには努力を惜しまない所存である。



